

# 各教科の正答率、問題の内容及び所見・解説

## 1 国語

### (1) 正答率

問 題	配 点	正 答		一 部 正 答		誤 答		無 答		通 過 率 率 = $\frac{\text{得点計}}{\text{(人数} \times \text{配点)}} (\%)$	
		数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)		
1	問 1	4	372	81.8	0	0.0	83	18.2	0	0.0	81.8
	問 2	6	186	40.9	190	41.8	52	11.4	27	5.9	65.0
	問 3	6	70	15.4	210	46.2	92	20.2	83	18.2	37.5
	問 4	4	349	76.7	0	0.0	105	23.1	1	0.2	76.7
	問 5	5	153	33.6	71	15.6	229	50.3	2	0.4	41.1
2	問 1 (1)	2	178	39.1	0	0.0	258	56.7	19	4.2	39.1
	問 1 (2)	2	155	34.1	0	0.0	258	56.7	42	9.2	34.1
	問 1 (3)	2	357	78.5	0	0.0	88	19.3	10	2.2	78.8
	問 1 (4)	2	158	34.7	0	0.0	185	40.7	112	24.6	34.7
	問 1 (5)	2	352	77.4	0	0.0	45	9.9	58	12.7	77.4
	問 2	3	161	35.4	0	0.0	292	64.2	2	0.4	35.4
	問 3	3	308	67.7	0	0.0	146	32.1	1	0.2	67.7
	問 4	3	401	88.1	0	0.0	53	11.6	1	0.2	88.1
3	問 1	4	366	80.4	0	0.0	87	19.1	2	0.4	80.4
	問 2	6	156	34.3	226	49.7	44	9.7	29	6.4	59.6
	問 3	4	202	44.4	0	0.0	249	54.7	4	0.9	44.4
	問 4	5	38	8.4	5	1.1	301	66.2	111	24.4	9.0
	問 5	6	43	9.5	122	26.8	124	27.3	166	36.5	23.2
4	問 1	3	395	86.8	0	0.0	47	10.3	13	2.9	86.8
	問 2	3	132	29.0	0	0.0	281	61.8	42	9.2	29.0
	問 3	3	138	30.3	19	4.2	190	41.8	108	23.7	32.7
	問 4	3	129	28.4	0	0.0	315	69.2	11	2.4	28.4
5	16	42	9.2	392	86.2	0	0.0	21	4.6	66.9	

(小数第2位を四捨五入しているため、%の合計が100にならない場合がある。)

### (2) 問題の内容

- 1 出典は原田マハ著『リーチ先生』である。問題文として使用した箇所は、芸術家を志して家を飛び出したものの、自分の表現すべきことを模索している沖亀乃介が、後の師匠となるイギリス人陶芸家バーナード・リーチとの出会いを通して、悩みながらも一步を踏み出そうとするまでを描いた場面である。「自分のやりたいことは本当にこれでよいのか」「自分は将来何をやりたいのか」という亀乃介の葛藤は、進路を考えていかなければならない受験生にとって共感しやすく、葛藤の中にあっても、それを乗り越えようと努力することの大切さに気がつくことができる。
- 2 漢字の読み書き、動詞の活用の種類、熟語の構成、助詞の意味(用法)、語句の意味についての理解を問う問題である。
- 3 出典は佐藤透著『美と実在 日本的美意識の解明に向けて』である。本書は、美と芸術が人に及ぼす力の観点から、「侘び」「寂び」「幽玄」という古来の美的概念の関係性を解明し、日本的美の特質をとらえ直している。問題文として使用した箇所は、「第二部 日本的美意識」の「第五章 侘びの美意識」の部分である。茶道における侘びの美意識と、西洋における美意識との相違点などに言及した後に、侘びの持つ美的戦略とは何か、それが私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか、という議論へ発展する。日本人としての美意識について、西洋の美意識と比較することで改めて問い直し、「侘びにおける美」とはどのようなものかを考えることは、日常生活の中であまり意識することがない「当たり前なこと」として処置しがちな事案に、新たな光をあて、思考することにつながるすることができる。
- 4 出典は『徒然草』の「第一八四段」である。『徒然草』は、鎌倉時代に成立した随筆で、知性と感性の両面から、人間のあり方を説いた「思想書」としての内容も兼ね備えた作品である。問題文として使用した箇所は、松下禅尼が息子である相模守時頼に、儉約の徳を教えようとして、自ら障子の切り張りをした逸話の部分である。
- 5 このグラフは、文化庁『平成28年度 国語に関する世論調査』における「書き言葉のコミュニケーション」の項目をもとに作成された円グラフである。資料から読み取ったことをもとに、「文字で伝える際、重視すること」についての自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験をふまえ、展開を工夫して書く力をみる問題である。

(3) 所見・解説

1 文学的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容を正確に理解する力をみる問題である。傍線部の直前の一文「光雲は、それを手に取ると微笑んだ。」や、直後の一文「そして、愉しげなまなざしを、亀乃介に向けた。」という表現から、亀乃介とリーチに対する光雲の心情を読み取る。芸術家を志している二人の若者に対して、芸術家の師匠として光雲はあたたかなまなざしを向けている。この読み取りに即した適切な選択肢工を選ぶ。

問2 登場人物の心情を読み取り、適切に表現する力をみる問題である。誤答としては、「東西の文化交流」についての具体的な内容を欠いたもの、「自分にしかできない方法」といった説明が不足しているものが多かった。傍線部「その強く確かな思い」の「その」が何を指し示しているのかを踏まえて、「東西の文化交流」についての具体的な内容、そしてその交流を「自分にしかできない方法」でやりたいという思いをもって日本へやってきたことを、本文中の表現を用いて指示された文脈と字数に合うようにまとめる。

問3 登場人物の言動の意味を的確にとらえ、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。誤答としては、「違い」「もどかしさ」についての具体的な内容を欠いたもの、「ぐったりとうつむいて」という表現がどのような気持ちを表しているかを的確にとらえられていないものが多かった。本文中における「ぐったりとうつむい」たときの気持ち、「違い」や「もどかしさ」は、次のように描かれている。

(1)「リーチとともに美術学校で一日を過ごした亀乃介は、かえって意気消沈してしまった。」  
そして、その理由となる美術学校の生徒たちの様子は、次のように述べられている。

(2)「この教室にいる生徒たちは、全員、選ばれた人であり、恵まれた人だ。難関の美術学校の試験に合格して、難しい本を読み、教授の高尚な話を理解し、高度な技術を身につけて、さらには芸術的感性を高めるべく、いま、この教室で作業に励んでいる。あまりにも、違うのだ。自分とは。」

また、美術学校の生徒たちと自分とを比べ、

(3)「描きたい、創りたいという思いは募れど、なかなかかたちにすることができない。どうすれば突破できるのだろうか。」

という「もどかしさ」を募らせていく。

この思いについては、美術学校へ行く前から、伏線として次のように述べられている。

(4)「何かもっと違う表現の道があるのではないかと、亀乃介は思い始めていた。」

「いつまで書生を続けたらいいのか、いつまでもいてはいけないのではないかと、という、漠然とした焦りが霧のように心にかかってもいた。」

以上の内容を「違い」「もどかしさ」という二つの言葉を使って、指示された文脈と字数で表現する。

問4 場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。傍線部「亀乃介の胸の中に一陣の風が吹き込んだ。」という亀乃介の心情は、傍線部以降、次のように言い換えられている。

(1)「ほんのひと言、だった。けれど、大きな大きなひと言だった。」

(2)「亀乃介は、目の前で、固く閉ざされていた芸術の世界への扉が、音もなく、けれど思い切って開くのを見た気がした。」

これらの表現から、自分の将来に対して希望を抱いている様子がわかる。亀乃介の心情を読み取り、最も適切な選択肢工を選ぶ。

問5 表現上の工夫に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。選択肢ウ「現在と過去、そして未来へと場面が交錯」について、本文中では場面が交錯していない。また、「亀乃介の成長していく様子が多面的に描写」とあるが、多面的に様々な視点から描かれているわけではない。選択肢オについては、「芸術に対する熱い思いが、亀乃介やリーチ、光雲の視点からそれぞれ語られることで」とあるが、視点として語られているのは、亀乃介、リーチ、光太郎であり、光雲については、芸術に対する熱い思いが語られていない。

以上のことから、本文の表現効果について読み取り、選択肢ウとオを選ぶ。

2 基礎的・基本的な言語能力をみようとした問題である。

問1 基本的な漢字の読み書きについての問題である。(1)「養蜂」は、様々な誤答がみられたが「ようばち」「ようはち」「ようちゅう」など「蜂」の読み誤りが多かった。(4)「権益」は、「権易」「検易」「権役」など、誤答が多岐に渡り、語彙として定着していない傾向がみられる。日常での漢字学習の際に、語彙として意味を理解するとともに、同音語や同訓語は文脈の中において、適切な漢字を判断しながら使用する必要がある。

問2 動詞「見る」と活用の種類が同じ動詞を選ぶという問題で、正答はエである。誤答としては、ア「読む」を選んだものが最も多かったが、これは活用形を問う問題と読み誤り、語形が似たものを選んだことが考えられる。活用の種類や活用形など、活用についての基本事項を押さえ、

例文や文章中の使用例も用いながら学んでいく必要がある。

- 問3 熟語についての理解を問う問題である。文脈から「拒否」と「承諾」という反対の意味となる熟語を作り、その際用いない漢字を選ぶ問いで、正答はア「贅」である。誤答としては、ウ「諾」が多かった。「諾」に引き受けるという意味があることが分からず、前述の結果につながったと思われる。熟語を理解する際、類義語や対義語にも目を向け、語彙を広げていく学習が必要である。
- 問4 助詞「の」の意味(用法)についての理解を問う問題で、正答はエである。正答率は高かったが、イヤウという誤答がみられた。助詞の意味や用法を理解する上で、前後に接続されている語の品詞や文脈上の意味に着目し、理解していく必要がある。
- 問5 慣用句や熟語についての理解を問う問題で、正答は「役不足」である。誤答として多かったのは、「力不足」であり、「役不足」との誤用で挙げられる言葉である。本来の意味と異なって用いられている語句については、意味や使い方の区別について例文等を用いながら理解し、語彙や表現を広げていく必要がある。

3 説明的な文章を理解する力をみようとした問題である。

- 問1 文章に書かれている内容を正しく読み取り、理解する力をみる問題である。傍線部 の直前に「日常生活的空間から、茶という別世界に導き入れる通路たるところに」茶室への露地の「特性」があると説明されており、直後には、「侘び茶が他の芸術一般と共通に持つ形式的特性であって、現実的時空からの乖離を旨とする芸術的エポケーにはかならない。同じように私たちは、美術館の入り口から展示室に至る通路でも日常生活空間から離脱する」と述べているので、茶道における「芸術的隔離性」とは、茶室への通路のことを述べていることがわかる。これに合う選択肢はイである。論理展開を正しく読み取ることが必要である。
- 問2 文章の構成や展開に注意して内容を理解し、適切に表現する力をみる問題である。パチカン宮殿の天井画と侘び茶室の「芸術的エポケー」について述べた部分に着目し、その違いを理解する。空欄アについては、文章中に「天井画には、通常の日常生活にはありえないほどの多彩な意匠が描き込まれている。」とあり、それが「豊饒さへと逸脱している」とあるので、ここを踏まえて解答する。空欄イについては、傍線部 の直後に「日常世界の持つ通常の豊饒さ、装飾、斉一さを去って数的乏しさ、簡素さ、不均斉へと導き」とあり、侘びの美の世界は天井画とは反対の方向へ進むことがわかるので、ここから解答を導き出す。文章を問題の指示に合うように再構成し、記述する力をつけていく必要がある。
- 問3 文章に書かれている内容のうち、事実と意見などを読み分けて内容を的確にとらえる力をみる問題である。庭のすべての朝顔を切り、茶室に一輪のみ生けた利休の行為が称賛されたのは、本文中にある「芸術的エポケーによって現実の時空から乖離する」ことや「侘びはもともと簡素さ、数的乏しさを旨とする」こと、「人が茶碗に銘を付けるのは、それを茶碗一般としてでなく、私たちが向き合うべき一つの対象とする」ことに基づいているからである。また本文中で、侘びは「人の見知らぬ新奇な対象を草庵に満たすというようなことはなく」とあるので、選択肢ウの記述だけが矛盾している。傍線部 の理由となる箇所を本文中から探し、選択肢の内容と照合しながら解答を導く必要がある。
- 問4 文章全体と部分との関係を考え、内容を正確に理解する力をみる問題である。傍線部 の内容は、それ以降で「私たちの悟性(理解力)は身の周りのものを概念的に把握してラベルを付け、それらの関係を認識する」、「私たちが多くの事物に囲まれているときに働かせている悟性の概念的把握および規則性への志向」「活発に働く悟性の規則性への志向」のように言い換えられている。この中で、傍線部の内容を指定字数で言い換えている箇所は、「悟性の概念的把握および規則性への志向」である。別の箇所にある同内容の表現を探して、与えられた条件に合うように判断する力が求められる。
- 問5 論理の展開の仕方をとらえて内容を理解し、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。侘びの持つ美的戦略が、私たちにもたらす契機について、本文の内容に即し、「現実」「悟性」の2つの言葉を用いながら、指示された文脈と字数で説明する。本文中では、芸術の持つ特徴について、「現実への眼差しの質的転換が主となるはずである。この転換はどのような特徴を持つのだろうか。」という問題提起があり、筆者は美的戦略における「悟性」に着目している。本文中では、「美としての侘びの戦略は、この悟性の活動を縮減することにある。」その結果、「悟性の働きを超える事象の新鮮な変化を構想力が捉えるとき、私たちはそこで現実と新たに触れなおして美を意識する。」「悟性の働きが戦略的に縮減されれば、私たちの構想力はやすやすとそれをを超えるだろう。」と述べている。さらに、「侘びの美はその独自の芸術的構えによって私たちの脚下にある現実を見つめ直させる。」とあるので、これらの記述から、侘びの持つ美的戦略がもたらす契機について説明する。筆者の主張の中心を読み取り、与えられた条件に合うように文章を構成し、記述する力が求められる。

4 古典を理解する基本的な力をみようとした問題である。

- 問1 歴史的仮名遣いについての理解をみる問題で、正答は「たまわりて」である。誤答としては、

「たまありて」「たまがはいって」などがみられた。文語のきまりを正確に理解するとともに、古文を音読し、古典特有のリズムを味わいながら古典の世界に触れる学習活動を行っていくことが大切である。

- 問2 場面や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解する力をみる問題である。「相模守時頼」と同じ人物を本文中の語を用いて解答する問題で、正答は「若き人」である。冒頭の「(相模)守を入れ申さる事(招待すること)」を踏まえると、来訪する「若き人」に見せるために母(松下禅尼)が自ら障子を一問ずつ張りかえているのが読み取れる。誤答としては、人物を示す語である「なにがし男」「その男」「城介義景」などがみられた。大意を把握するだけでなく、登場人物の関係を意識しながら読むことが求められる。
- 問3 文章に書かれている内容を、叙述に基づいて的確にとらえる力をみる問題である。正答は「障子を張りかえる」であるが、誤答としては、「世話役をつとめる」「障子が破れている」など、文脈から内容を正しく読み取れなかったことに起因するものが多かった。文章の展開に即し、丁寧に読んでいく力をつける必要がある。
- 問4 古典に表れたものの見方や考え方をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。正答はアの「儉約を心がける」ことである。誤答としては、エの「見苦しい部分を一新する」が多かった。古典と現代の考え方との共通点や相違点に触れることや、登場人物や作者の思いなどを想像する学習活動を行っていくことが大切である。
- 5 「文字で伝える際、重視すること」についての自分の考えを、資料から読み取ったことをもとに、自らの体験をふまえて書く力をみよとした問題である。資料は文化庁『平成28年度 国語に関する世論調査』より作成したものである。自分の考えを書く活動では、目的や意図に応じて、語句や表現の仕方、構成を工夫することが求められる。また、文章全体を通して論理に矛盾がないか確かめることも重要である。
- 誤答としては、資料から読み取ったことを文章の中に書いていないもの、自分の体験が書かれていないものが多かった。また、主語・述語の関係が不適切なものや誤字・脱字、接続詞に誤りのあるものなどがみられた。目的や意図に応じて伝えたいことを明確にするために、記述に関わる様々な表現の仕方や、資料を適切に引用して文章を書くことを身に付けていく必要がある。